

世界の米生産と貿易市場

篠 浦 光

1. はじめに
2. 世界の米生産
 - (1) 地域別動向
 - (2) 国別動向
3. 世界の米貿易市場の変化
 - (1) 戦前の米貿易市場と戦後の再建
 - (2) 1960年代以降の米貿易市場の変

- 化(1)——輸出——
- (3) 1960年代以降の米貿易市場の変
- 化(2)——輸入——
- (4) 1960年代以降の米貿易市場の変
- 化(3)——貿易構造——
4. 世界の米貿易市場の特徴
5. おわりに

1. はじめに

本稿は、1960年代以降の世界の米生産の動向と貿易市場の変化をあとづけるとともに、それを通じて世界の米の貿易市場の構造と特徴を明らかにすることを課題としている。

いうまでもなく、米はアジア諸国の主食であり、その生産量は世界総生産量の約9割をしめている。しかし、他方で世界には米の生産を行っている国が約100あり、また約160、すなわち世界のほとんどの国が少量にせよ米の輸入を行っている。

このように米は世界の食糧において重要な地位を占める国際商品であるが、米の貿易市場は小麦のそれと著しく異なる特徴を持っている。しばしば指摘されるように米の貿易市場は「薄い市場 (thin market)」⁽¹⁾であって、生産量にしろ貿易量の比率は4% (小麦の5分の1) にすぎず、その量は約1,200万トンで日本の生産量とほぼ同程度にすぎない。

貿易市場の構造をみても、かつては輸出入とも主としてアジア地域内部に行われていたが、いわゆる緑の革命の進展によるアジア諸国の自給率向上によって、アフリカや中近東の比重が高まってきた。

このような世界の米の生産と貿易市場の実態について正確な認識を持つことは、わが国

の米に関する政策、とりわけ貿易政策を決定するに当たって不可欠と思われる。

本稿では、次節で1960年代以降の世界の米生産の動向を地域別、国別に概観し、第3節では1960年代以降の貿易市場の変化と現在の構造を、第4節では貿易市場の特徴を明らかにする。さいごに、以上の要約と若干の展望を行うとともに、それが日本にとって持つ意味について考察することとしたい。

2. 世界の米生産

(1) 地域別動向

はじめに、世界の米生産の現状をFAOのProduction Yearbookによって地域別に概観しておこう (第1表)。

FAOでは、世界を市場経済開発国、市場経済開発途上国、計画経済国に区分したうえ、さらにそれを地域区分している。アジア諸国は、市場経済開発途上国の「アジア」と計画経済国の「アジア」に大別され、日本は別に市場経済開発国の「その他地域」(他はイスラエルと南アフリカ)に含まれている。そこで、参考のためこれら3者の合計値をアジア地域として特掲しておいた (なお、アフリカ大陸諸国のうちエジプト、スーダン、リビアは中近東に含まれているので注意されたい)。

世界の1985~87年平均の米生産量は、粳

第1表 世界の米生産と穀物生産の概況 (1985～87年平均)

(単位:千トン,%)

	米生産量	地域別 シェア	穀物 生産量	地域別 シェア	穀物総生産に占める比率				
					米	小麦	とうもろこし	ミレット	ソルガム
世界国	466,701	100.0	1,832,096	100.0	25.5	28.4	26.6	1.6	3.7
市場経済開発国	22,768	4.9	607,908	33.2	3.7	30.5	42.4	—	4.3
北米	5,987	1.3	366,775	20.0	1.6	23.8	57.7	—	6.5
西欧	1,932	0.4	190,754	10.4	1.0	42.3	19.9	—	0.2
オセアニア	700	0.1	24,001	1.3	2.9	63.2	1.8	0.4	5.5
その他	14,149	3.0	26,378	1.4	53.6	12.6	29.3	0.1	1.9
市場経済開発途上国	243,120	52.1	549,300	30.0	44.3	16.7	18.5	1.3	6.5
アフリカ	7,451	1.6	58,742	3.2	12.7	11.7	29.7	17.5	16.9
中南米	17,682	3.8	109,092	6.0	16.2	19.9	50.1	0.1	11.4
中近東	5,109	1.1	65,343	3.6	7.8	55.5	10.9	1.6	4.9
アジア	212,487	45.6	316,085	17.3	67.3	19.0	7.1	2.6	3.2
計画経済国	200,812	43.0	674,889	36.8	29.8	30.9	17.4	1.3	0.9
アジア	197,904	42.4	380,748	20.8	52.0	23.5	1.9	1.5	1.6
ソ連・東欧	2,908	0.6	294,141	16.1	1.0	40.5	14.9	1.0	0.1
(参考) アジア地域	424,897	91.0	712,230	38.9	59.7	21.1	13.5	2.0	2.2

資料: FAO, Production Yearbook.

ベースで約4億6,700万トンであった。地域別には、アジア地域が約4億2,500万トン(91%)と圧倒的比率をしめており、その内訳は市場経済開発途上国に含まれる国々が約2億1,200万トン、計画経済国に含まれる国々が1億9,800万トン、日本が1,410万トンである。

次に中南米が1,770万トンで3.8%をしめ、以下アフリカ750万トン(1.6%)、北米600万トン(1.3%)、中近東510万トン(1.1%)が1%台であり、ソ連・東欧290万トン(0.6%)、西欧190万トン(0.4%)、オセアニア70万トン(0.1%)はごく少ない。

次に、視点を変えて、各地域の穀物生産において米がどのような地位をしめているかをみてみよう。

米は、小麦(85～87年平均5億2,000万トン)、とうもろこし(同4億8,700万トン)と並ぶ3大穀物の1つであるが、地域別には大きな偏りがある。穀物生産に占める米の比率が最も高いのは、アジア地域の60%である。米が主食であると一般に考えられているアジア地域の比率が意外に低いのは、2大穀

物生産国である中国とインドで小麦の生産量が多いほか、とうもろこし、ミレット(ひえの類)、ソルガム(きびの類)といった雑穀の生産が相当量あることによる。

その他の地域では米の比率はかなり落ちるが、それでも中南米で16%、アフリカで13%、中近東で8%とかなりの比率を占めていることが注目されよう。あとでみるように、この地域には米を主食とする国がかなり存在するのである。

これに対し、先進国ではオセアニアで3%をしめるほかは、北米1.6%、西欧1%、ソ連・東欧1%と極めて低い。よくいわれるように、これらの地域では米は主食としてではなく、ベジタブル(野菜)的に食べられることが多いのである。なお、参考までに、各地域のその他の穀物の比率を掲げておいた。北米、西欧、中近東では小麦、中南米ではとうもろこし、アフリカではとうもろこし、ミレット、ソルガムの比率が高く、主食的地位をしめていることがわかる(とうもろこしやソルガムは先進国ではもっぱら飼料用だが、開発途上国では主として主食として消費されている)。

次に 1960 年代以降の米生産の動向をみることにしよう（第 2 表）。

世界の米生産量はこの期間に 2 億 5,300 万トンから 4 億 6,700 万トンへ 84% の増加となった。この増加率はとうもろこしの 120%，小麦の 104% をやや下回るが、大麦、ミレット、ソルガム等他の穀物の生産が伸び悩んだことから、穀物全体の伸び率 85% とほぼ同じものであった。

この時期は米の収穫面積は 16% の増にとどまったから、生産量は主として単収の増加（60%）によるものであった。

地域別にみると、アジアでは、まず、中国が圧倒的な比重をしめる計画経済国のアジアは、収穫面積の伸びが最も低く（6%）、反面単収の伸びが最も高く（85%）、生産量は倍増した。市場経済開発途上国のアジアもほぼ同様の傾向を示し、収穫面積が 17%、単収が 58% 増加して、生産量は 85% 増加した。

アジアにつぐ生産量をもつ中南米、アフリカ、アメリカは、いずれも約 2 倍に増加した。ただし、その内容を見ると、中南米とアメリ

カでは面積と単収がいずれも 4 割程度の増になっているのに対し、アフリカでは面積増（75%）の寄与率が高い。

他方、中近東と西欧は、面積が 20%、単収は 20～10% 増で生産量は 1.5～1.4 倍にとどまった。また、ソ連・東欧とオセアニアの生産は、60 年代の生産量が小さかったこともあって 5 倍をこえる伸びを示した。なお、先進国の「その他地域」で面積が約 3 割、生産量が 14% 減少しているのは、もっぱら日本の減反によるものである（「その他地域」に含まれるイスラエルは米の生産がなく、南アフリカは 1 千 ha、3 千トンにすぎない）。

さいごに、各地域の単収水準をみておこう。

85～87 平均の世界のヘクタール当たり米の収量は、籾ベースで 3,253 kg となっているが、地域により大きな差異がある。まず、先進国は、オセアニア 6,370 kg、「その他地域」6,244 kg、北米 6,178 kg、西欧 5,750 kg と、おおむね 6,000 kg 水準ないしそれ以上の水準にある。

その他の地域で単収の高いのは、中国を中

第 2 表 世界の米収穫面積、単収、生産量とその動向

	1985～87 年平均			1985～87 年平均 1961～65 年平均		
	収穫面積	ha 当り収量	生産量	収穫面積	ha 当り収量	生産量
	千ha	kg	千トン	%	%	%
世 界	143,451	3,253	466,701	115.6	159.5	184.3
市場経済開発国	3,681	6,185	22,768	85.9	125.9	108.1
北 米	969	6,178	5,987	137.4	141.2	194.1
西 欧	336	5,750	1,932	120.9	114.3	138.3
オセアニア	110	6,370	700	500.0	103.3	514.7
そ の 他	2,266	6,244	14,149	69.0	124.6	86.0
市場経済開発途上国	98,109	2,478	243,120	121.1	153.2	185.5
ア フ リ カ	4,998	1,491	7,451	175.2	116.3	203.9
中 南 米	7,567	2,337	17,682	145.1	135.1	196.1
中 近 東	1,225	4,171	5,109	122.7	122.2	150.0
ア ジ ア	84,307	2,525	212,847	117.1	158.1	185.2
計 画 経 済 国	41,659	4,820	200,812	107.4	184.9	198.6
ア ジ ア	40,956	4,832	197,904	106.1	185.3	196.7
ソ 連 ・ 東 欧	704	4,130	2,908	341.7	166.9	570.2
(参考) アジア地域	127,528	3,332	424,897	112.0	163.2	182.8

資料：前表に同じ。

心とするアジアの計画経済国の 4,832 kg と中近東の 4,171 kg である。しかし、市場経済開発途上国に属するアジア諸国の単収は 2,525 kg、中南米は 2,337 kg と上記の国々とは大きな開きがあり、さらにアフリカは 1,491 kg と先進国の 4 分の 1 以下の水準にある。くわしくはふれないが、このような単収差の最大の原因は、先進国、中国、中近東での稲作はほとんどが灌漑稲作として行われているのに対し、その他の地域では天水に依存する水稲作や陸稲がかなりの比重を占めているためである。

(2) 国別動向

世界の米生産についてより明確なイメージを持つために、国別に立ち入ってみよう。

世界で米の生産を行っている国は想像以上に多い。FAO の Production Yearbook によれば、1987 年に世界で穀物の生産を行っている国（属領を含む）は 150 あるが、そのうち 106 の国で米の生産を行っている。

地域別にみると、アフリカ（南アフリカを含む）が 38 カ国と最も多く、中南米 27、アジア 19（先進国 1、市場経済開発途上国 14、計画経済国 4）、中近東とソ連・東欧が各 6、西欧 5、オセアニア 4、北米 1 となっている。

アフリカ、中南米、中近東でかなりの国が米生産を行っていることが注目されよう。もちろん、この中にはごく少量の生産しか行っていない国も含まれているので、20 万トン以上の生産を行っている 46 カ国の分布を示したのが第 1 図である。なお、同図には 1985～87 年平均の生産量を掲げておいた。

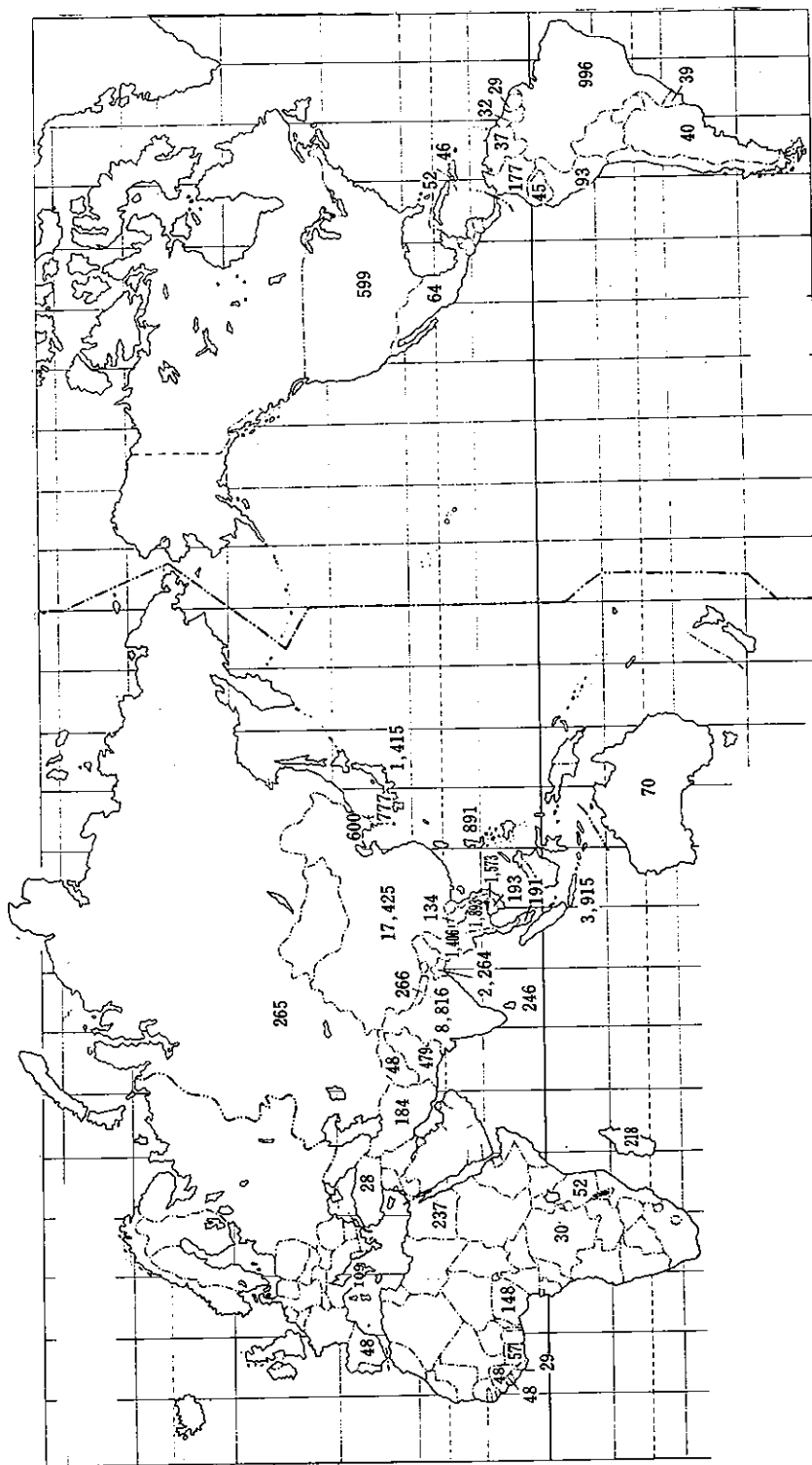
これをみると、いくつかの特徴がよみとれる。

まず、全体的傾向として、米の生産地域は熱帯から温帯（熱帯に近い地域）に分布している。稲の生育には高温と湿潤という気象条件が必要とされるためである（小麦生産地帯は逆に温帯の寒帯に近い、より乾燥した地域

に分布している）。

地域別には、アフリカの米の主産地は西アフリカ諸国とマダガスカルである。もともと西アフリカは、オリザ・グラベリマと呼ばれる、アジア原産のオリザ・サチバとは異なった種の稲の原産地であり、ニジェール川流域やギニア湾沿岸地帯で天水を利用できる低い湿地等では水稲の栽培が行われ、また、内陸では焼畑による陸稲の生産も行われていて、古くから米の食習慣があった（現在は大半がオリザ・サチバに変わっている⁽²⁾）。また、マダガスカルは、インドネシアから渡来した人々が住みついたといわれ、稲もそのさいに持ち込まれたといわれる⁽³⁾。穀物生産にせまる米の比率をみても、西アフリカのギニア、リベリア、シエラレオネは 8 割、コートジボワールやギニア・ビザウも 5 割を超える。また、マダガスカルでは 9 割に達する。その他の国では第 2 表からうかがえるように、アフリカの伝統的主食であるミレット、ソルガムや中南米から伝わったとうもろこしが主要な食糧となっているが、ケニア、タンザニア等東アフリカの諸国でも、河川水による灌漑が可能などころでは水稲栽培が導入されている。ただし、アフリカ諸国の稲作の大半は、焼畑耕作の一環として栽培される陸稲と天水に依存する水稲作かであり、灌漑水稲が少ないため、単収は先に述べたように低い。

中南米の伝統的主食はとうもろこしであるが、その中でも中米およびカリブ海諸国と、南米のいわゆるアンデス諸国では米は重要な地位を占めている。カリブ海諸国のキューバ、ドミニカでは米は穀物総生産量の 8 割に達し、中米南部のコスタリカ、パナマで過半をしめる。南米のカリブ海に面するガイアナとスリナムは、ほぼ 100% 米である。アンデス諸国においては、アンデス山脈から流れでる河川水を利用した灌漑水稲が栽培されている。コロンビア、エクアドル、ペルーでは米が約半分をしめており、ラプラタ諸国のウルグア



第1図 世界の米生産 (1985～87年平均)

資料：FAO "Production Yearbook".

注(1) 単位：万トン

(2) 1987年の生産量(稲)が20万トン以上の国をとりあげた。

イでも約4割をしめる。中南米最大の米生産国はブラジルであるが、その大半は陸稲である⁽⁴⁾。単収水準は国によってかなり差があり、灌漑水稻の多いカリブ海諸国やアンデス諸国では3,000～4,000 kg 水準であるが、陸稲の比率の高いブラジルやボリビアでは2,000 kg を下回っている。

乾燥地帯に属する中近東では、河川や地下水の利用が可能などところでだけ稲作が行われる。最大の生産国はナイル川を利用するエジプトであり、ついでイランのカスピ海沿岸は降雨量にも恵まれ、かなり広範に水稻栽培が行われている。中小の河川に恵まれたアフガニスタンでもかなり生産がある⁽⁵⁾。ただし、中近東地域の主食は小麦であって、米の比重は高くなく（第2表参照）、最高のエジプトで26%、イラン16%、アフガニスタン11%といったところである。しかし、すべて灌漑水稻であることから単収は高く、とくにエジプトは5,700 kg を超え、開発途上国としては最高水準にある。

アジアは世界の米生産の9割をしめる大生産地域である。このうち、最大の生産国である中国とインドだけで世界の56%をしめる（それぞれ37%、19%）。小麦の上位2カ国の比率が33%（中国17%、ソ連16%）であることと比べて米生産の上位国集中率は際だって高いことが注目されよう（米の3位インドネシア、小麦の3位アメリカを加えるとそれぞれ65%、44%となる）。ただし、両国の穀物生産にしめる米の比率は先にふれたようにそれほど高くなく、それぞれ50%、55%となっている。単収の水準は、東アジアの北朝鮮、韓国が6,000 kg 水準を超え、中国も5,000 kg 水準を超える。東南アジアや南アジアの単収はまだ低く、インドネシアは4,000 kg 水準に達しているが、第2位の生産国であるインドや輸出国であるタイは2,000 kg 水準にとどまっている。その最大の理由は灌漑率の差である。

ヨーロッパの米生産はヨーロッパ大陸南部の地中海諸国にほぼかぎられていて、生産量も多くない。最大のイタリアで110万トン、次がスペインの50万トン、ポルトガルの15万トンである。穀物生産にしめる米の比率は、ポルトガルが9%と比較的高いが、イタリアで6%、スペインでは3%弱にすぎない。灌漑地帯で行われるため単収は6,000 kg 水準と高い。

その他の国では、オーストラリアの生産が伸びてきた（85～87平均で70万トン）が、灌漑可能な地域が南東部の特定地域に限られているのでおおむね限界と思われる。単収水準は6,300 kg と高いが、降雨量による収量変動が激しい。

ここで、ジャポニカ種（中短粒種）、インディカ種（長粒種）別の生産状況にふれておこう。ジャポニカ種を栽培するのは、アジア諸国では日本、韓国、北朝鮮、台湾と中国の一部（淮河以北）、その他地域ではイタリア、スペイン、エジプト、アメリカのカリフォルニア、オーストラリアにほぼ限られる。なお、インドネシアのBuluはジャポニカ種とインディカ種の間型といわれる⁽⁶⁾。

その他の地域、すなわちアジアの大半の国々とアフリカ等では、インディカ種が栽培される。両者の比率は必ずしも明らかではないが、ジャポニカ種を栽培するのは中国を除けば生産量がそれほど多くない国であり、また中国でもジャポニカ種のシェアは小さい⁽⁷⁾といわれるから、世界の生産量の大半はインディカ種とみてよいであろう。

さいごに、国別の生産の動向について、特徴的な点だけを述べておこう⁽⁸⁾。まず、アジアでは、いわゆる緑の革命の進展によって韓国、フィリピン、インドネシア、インドではほぼ自給が達成された。韓国では過剰が問題になろうとしており、インドネシアでも85年には豊作による大幅な価格下落があった。スリランカ、マレーシアも自給率が向上した。

かつて輸出国であったベトナムは戦禍の影響もあって 80 年代に入るまで生産は低迷を続け、輸入国に転じていたが、経済改革によって最近生産が順調に増加しているといわれる。

アフリカ諸国について、60 年代以降の生産の動きをみると、国別にかかなりの差異がみられるが、がいして西アフリカやマダガスカルのようにもともと米の比重が高かった国の伸び率が相対的に低く、その他の地域で高いという傾向がみられる。もともと米の比重が高かった国では新たな灌漑投資が行われなにかぎり面積の拡大が困難であるのに対し、その他の地域では米がミレット、ソルガム等伝統的な食糧に比べて食味がよく、また、調理が容易であることから、都市住民の消費が増大しており、灌漑可能な土地を中心に米が導入されたことによるものである。

中南米については、多くの国で収穫面積、単収ともかなり伸びた。コロンビアがその典型であるが、在来種からアジアの緑の革命の契機となった IR 種への転換がかなりすすんだ。他方陸稲の多いブラジルは単収が伸びず、生産量も伸び悩んでいる。

中近東については、エジプトは収穫面積、単収ともほぼ限界に達したとみられる。気象条件に恵まれたイランで収穫面積が伸びたが、その他の国では、栽培適地に限りがあり、伸び悩んでいる。

西欧については、イタリアの生産は主として収穫面積の増加により 8 割増加したが、スペインは 25% 増にとどまった。

説明は省略するが、ここで参考までに主要国の 1 人当たり米消費量を掲げておこう（第 2 図）。

3. 世界の米貿易市場の変化

（1）戦前の米貿易市場と戦後の再建

前節では、世界の米生産の動向を地域別、国別に概観し、アジア以外にも米の生産を行

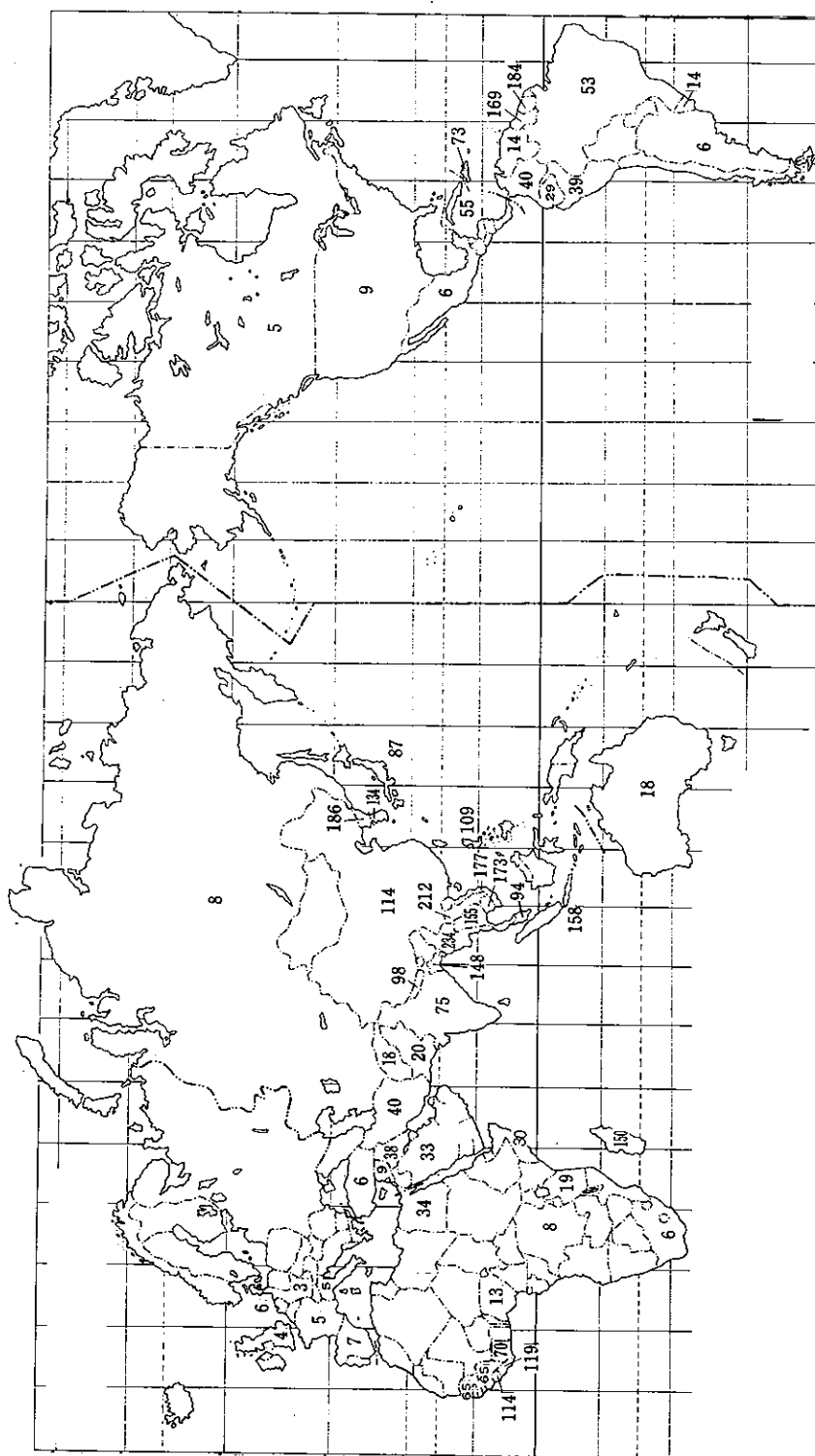
っている国が多数存在すること、また、米の生産の拡大のテンポは地域や国によってかなりの差異が存在することをみてきた。おおまかにいえば、アジアの生産は順調に伸び、かなりの国で自給が達成されたのに対し、中近東の伸びは相対的に低位であった。アフリカや中南米の生産は順調に伸びたが、ここでは伝統的主食であるミレット、ソルガム、とうもろこし等の伸び悩みがあった。先進国では、北米、オセアニアの生産は順調に伸びたが、西欧の伸びは低かった。これらの事情は、米の貿易市場を大きく変化させることとなった。

以下、本節では、60 年代以降米の貿易市場に生じた変化と、現在の米貿易市場の構造を明らかにしたいと考えるが、課題に接近する前提として、戦前の米の貿易市場と第 2 次大戦後の再建の状況についてかんたんにみておくことにしよう⁽⁹⁾。

米が国際商品として登場し、世界貿易市場が成立したのは、蒸汽船による海上輸送、スエズ運河の開通等いわゆる交通革命が進展した 1870 年代のことであった。

米の貿易市場が成立する契機となったのは、ヨーロッパ諸国によるアジアからの米の買付けであった。まず英領ビルマが、次いで仏領インドシナ（主として現在のベトナム）とタイが輸出国として登場した。ヨーロッパの米需要は、食糧としての需要、工業原料（織物用澱粉の原料および醸造原料）としての需要、および家畜飼料としての需要からなり、これに再輸出のための需要がプラスされたものであった。

19 世紀末から第 1 次大戦まで、ヨーロッパ各国で当時粳の形で輸出されていた米を脱穀、調製する精米業が栄え、国内需要を満たしただけでなく、ヨーロッパ周辺諸国さらにはキューバ、ブラジル等中南米諸国やアフリカ地域まで再輸出された。しかし、第 1 次大戦による輸入途絶や輸出の形態が粳からカーゴライス、精米に変わるにつれて精米業は没



第2図 世界の米消費 (1985~87年平均)

資料：FAO "Production Year book", "Trade Year book".

注(1) 単位：kg.

(2) 1987年の生産量(概)が20万トン以上または輸入量(精米)が10万トン以上の国をとりあげた。

落し、再輸出も大幅に減少した。

ヨーロッパの需要につづいて、19世紀末にはセイロン（スリランカ）、マラヤ、ジャワ、フィリピンなど、中国やインドからの移民労働者に依存しながらプランテーション作物と鉱物資源を中心に輸出を伸ばしてきたアジア熱帯地域で米の需要が増大してきた（中南米の需要はヨーロッパの再輸出米が満たした）。米の輸出市場の重点は、次第にヨーロッパからアジアへ移ってくる。さらに、20世紀初頭には、インド、中国、日本というアジアの大国が恒常的な大輸入国として登場することにより、米の貿易はアジア輸出国からアジア輸入国への流れを中心とするアジア域内貿易の性格を強めてくる。ただし、日本は、朝鮮、台湾という当時の植民地の生産を奨励して1つの需給圏を形成する。

このような戦前期の貿易市場を数量的にみておくと、1934～38年平均で、輸出国については、5大輸出国すなわちビルマ300万トン強、タイとインドシナがともに130万トン強、朝鮮約120万トン、台湾は70万トンであり、輸入国としてはインド（パキスタン、バングラデシュを含む）約220万トン、日本180万トン、マラヤ・シンガポールと中国が70万トン強、セイロンと香港が50万トン強、インドネシア30万トン弱といったところであった。当時の世界の輸出量は965万トン、うち93%がアジアからであり、米の輸入の73%までがアジア諸国によるものであった。

これを当時の世界の米の生産量と対比すると9.8%にあたり、ほぼ小麦の輸出量（1,730万トン）が総生産量（1億6,754万トン）に占める比率（10.3%）に匹敵していた。

第2次大戦により崩壊した米の貿易市場がようやく再建されたのは1950年代半ばのことであった。ただし、それは日本（輸入）、朝鮮、台湾（輸出）からなる需給圏、ビルマ（輸出）、インド、セイロン（輸入）からなる

需給圏、インドシナ（輸出）、フランス本国とアフリカ植民地（輸入）からなる需給圏を崩壊させ、旧輸出国（地域）から朝鮮、台湾、インドシナを脱落させ、新たにアメリカを輸出国として登場させる形で、世界を単一の需給圏として再編成する再建であった（なお、マイナーな需給圏としてイタリア、スペインを輸出国とするヨーロッパ需給圏も再建された）。そこでは、もっぱら旧輸出国の輸能力の低下によって貿易規模は大幅に縮小しており、減少分は代わって小麦が埋めるという形をとったことが特徴的であった。世界の1934～38年平均の輸出量965万トンに対し、1950年の輸出量は412万トンと半分以上に減少しており、アジアについては899万トンから292万トンに激減していた（アメリカは7万トン→49万トン）。他方、アジアの小麦輸入量は178万トンから1,177万トンへ、大半をアメリカからの援助に依存しながら急増していたのである。

（2）1960年代以降の米貿易市場の変化

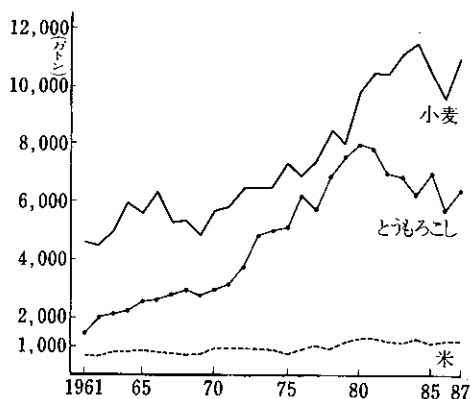
（1）——輸出——

次に1960年代以降に米貿易市場に生じた変化をみていこう。まず輸出面からみていくこととする。

1950年時点で412万トン、55年でも540万トンにとどまっていた米の輸出量は、60年には700万トンにまで回復した。その後80年までの20年間、傾向的にはゆるやかな増加をつづけてきたが、輸出量が戦前水準を超えたのはようやく1977年のことであり、その伸び率は小麦やとうもろこしと比べると著しく低かった（第3図）。

ところで米の輸出量は、80年をピークに停滞傾向に入った。81、82年と1,300万トン台を記録した輸出量は、87年まで1,100～1,200万トン台で低迷しており、新しい段階に入ったことを思わせるものがある。

以下、主要輸出国別によりやや立ち入ってみよ



第3図 世界の米、小麦、とうもろこしの輸出量の推移

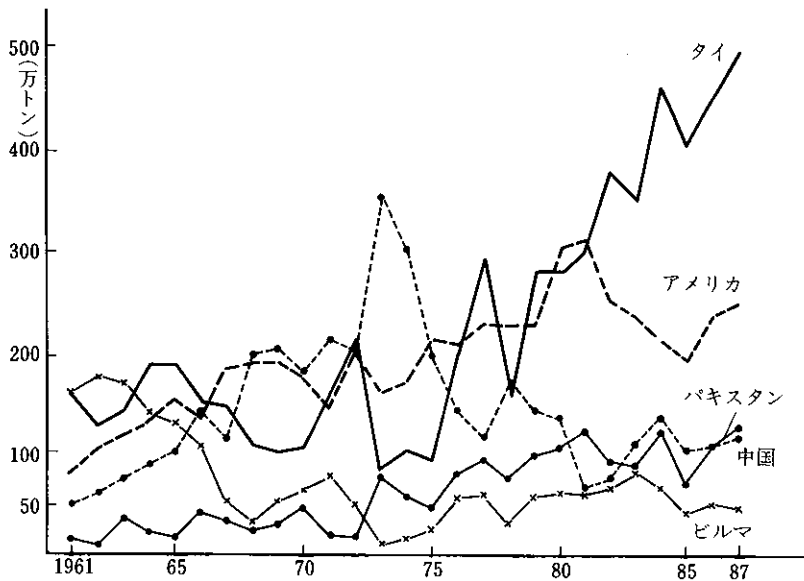
資料：FAO "Trade Yearbook".

う（第4図）。まずアジア地域についてみると、戦前最大の輸出国であったビルマは、61年には170万トンまで回復していたが、67年には100万トンを割って54万トンまで減少し、以後おおむね50～60万トン水準に低

迷している。戦禍をまぬがれたタイは、61年時点で150万トンとビルマに次ぐ地位をしめるが、75年まで年々の増減はあるものの（85～210万トン）おおむねその水準で横ばいをつづける。タイの輸出が増加に転ずるのは76年以降であり、77年は200万トン台、81年は300万トン台、84年は400万トンを超えるという急増ぶりであった。

戦前の3大輸出国の1つであったインドシナ（ベトナム、カンボジア）は、戦後の独立戦争や内戦等で輸出力を失い、輸入国にとどまっていたが、近年の生産増により89年には大量の輸出を行なったといわれる⁽¹⁰⁾。

戦後輸出国として新たに登場したのは、中国とパキスタンである。中国は戦前輸入国であったが、戦後は米の輸出を外貨獲得の有力な手段として用い、一方で大量の小麦を輸入しながら、他方で価格の有利な米を輸出する米輸出国となった。輸出量は、とくに60年



第4図 主要輸出国の米輸出量の推移

資料：前図に同じ。

代後半から 75 年にかけて 200～300 万トンの水準にあった。当時は、国際価格高騰時に多く輸出するという巧妙な戦略がとられていたが、現在は、おおむね 100 万トン水準で低迷している。一つには米価が相対的に低落したためであるが、国民所得水準上昇に伴う消費量の増と 85 年以降の生産の停滞がより大きな理由であろう。他方で、低質米を中心に約 50 万トンの輸入を行っていることも注目される。パキスタンは古くからバスマティ米（香り米）と呼ばれる優等米の輸出国であったが、緑の革命の進展によって灌漑の整備されたパンジャブ地方で IR 種が導入され、70 年代後半から 100 万トン水準の輸出国となった。現在の輸出は、量的には IR 米がバスマティ米を大きく上回っている。

ネパールは 60 年代以降もっぱらインドに約 20 万トンの輸出を行っていたが、80 年代に入って急減した。

以上みてきたタイ、ビルマ、中国、パキスタンがある程度安定した輸出国であるのに対し、近年、不作年には輸入し、豊作年には輸出するいわゆる限界的輸入国兼輸出国が生まれてきたのがアジアの特徴であるが、この点は輸入を扱うさいにみることにする。

アメリカの輸出量は 1950 年には 50 万トン弱であったが徐々に増加して 62 年は 100 万トンを超え、食糧危機の 72 年に 200 万トンを超え、80、81 年と 300 万トン台を維持する。しかし、80 年代に入ってから輸入需要の停滞とタイの輸出増加によって以後減少し、85 年には 200 万トンを割るが、86 年以降の輸出振興策とくに 87 年のマーケティング・ローン制度の採用もあって、87 年の輸出量は 247 万トンまで回復した。

その他の地域については、イタリアの輸出が 1961 年の 20 万トンから 85 年には 73 万トンへ順調にのびたが、87 年には 60 万トンに減少している。イタリアの輸出は、大半が西欧域内への輸出である。

また、オーストラリアの輸出も伸びてきたが、気象条件による収穫変動を受けて輸出力の変動も激しく、80 年代に入っても最低の 18 万トンから最高の 60 万トンへと大きく変動している。

以上を概括すれば、戦前と対比した場合、ビルマ、ベトナムの退潮、タイ、アメリカの躍進、中国、パキスタンの登場（より小規模な形でオーストラリア）が特徴といえよう。ただし、ベトナムは、近年の経済政策の転換で多分に飢餓輸出的傾向を持ちながらも、新たに輸出国として再登場する可能性がある。

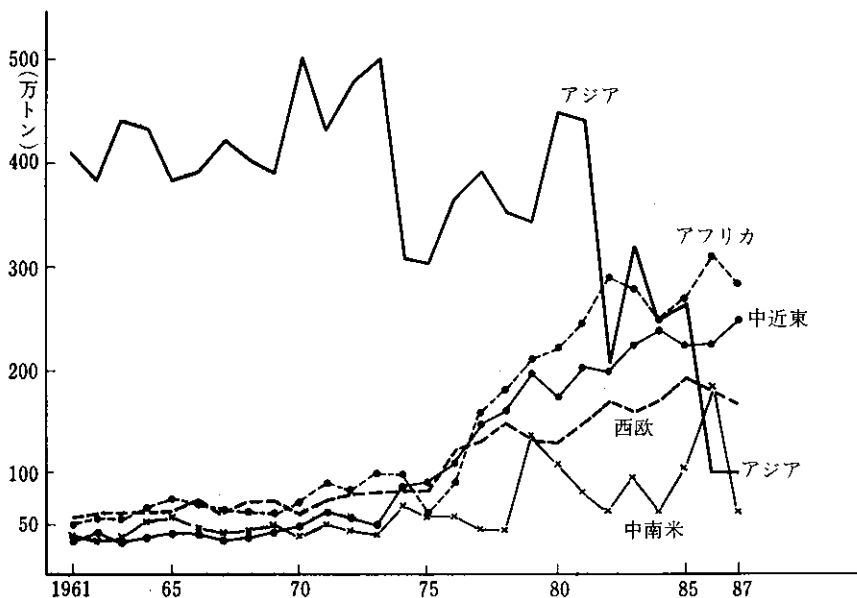
（3） 1960 年代以降の米貿易市場の変化

（2）——輸入——

次に輸入についてみよう。輸入量の変化は輸出量以上に大きかったといえることができる。（第 5 図）

地域別には、アジアの大幅な減少とアフリカ、中近東の増加が特徴的である。アジアの輸入量は 70 年代初めまで約 400 万トンの水準で横ばい状態にあったが、その後減少傾向に入ってから 75 年には約 300 万トンとなった。80、81 年には 450 万トンに回復するが、その後激減して 87 年には 132 万トンへ、61 年のじつに 3 分の 1 に減少した。世界貿易全体にしめる比率は 64% から 11% にまで低下した。

他方、アフリカと中近東は、アジアの減少を埋めるような形で 70 年代後半からめざましく増加した。アフリカは 82 年、中近東は 86 年にアジアの輸入量を上回り、87 年にはそれぞれ 290 万トン、265 万トンと全体の 24%、22% をしめるにいたった。西欧はゆるやかなテンポながら一貫してのびてきたが、86、87 年とやや減少し 167 万トン（14%）となった。今後の動きが注目される。中南米の輸入は 80 年代に入ってから年次変動が激しかったことが注目されよう。たとえば、85 年 106 万トン、86 年 210 万トン、87 年 85 万ト



第5図 主要輸入地域の米輸入量の推移
資料：前図に同じ。

ンと変動している。

次に国別に立ち入ってみよう。

米の輸入を行っている国も想像以上に多い。FAOのTrade Yearbookによると、1987年に1,000トン以上の輸入を行った国は164あった（輸出を行った国は61）。これは小麦の181をやや下回るが、とうもろこしの126をかなり上回るものである。米は世界のほとんどの国で消費されているのである。ただし、国ごとの輸入量は少ない。87年の世界の米の輸入量は1,210万トンであったから、1国平均にすると7.4万トンであり、小麦の60万トン、とうもろこしの51万トンのそれぞれ12%、14%にすぎない。米の貿易市場がいかに細分化されたものであるかがわかるであろう。

ここでは、その中で主要ないくつかの国を取り上げ、特徴的な動きをみることにしよう。

最大の特徴は、戦後のある時期に世界最大の輸入国であった経験を持つインド、インド

ネシア、韓国、日本の4国が輸入市場から姿を消したという点である。

まず、インドは70年代初めまでおおむね50～100万トンの輸入を行っていたが、72年以降減少に転じ、78年からは30万トン程度の輸出を行うようになった（ただし、83年には32万トン、84年には58万トンの輸入を行った）。

インドネシアは、60年代前半には100万トン台、73～80年には200万トン近い輸入を行う大輸入国であったが、以後激減し、85、86年には20～10万トンの輸出を行うようになった。

韓国の輸入は、69～72年と80、81年に2つのピークを形成した。とくに80、81年の輸入は合計350万トンにのぼるものであった。前者のピークは高度成長による都市世帯の所得水準の上昇による消費の増加があった反面、農業生産が停滞したことによるものであり、後者は増産政策の柱として導入された

統一系と呼ばれる IR 系品種が 80 年の冷害によって大減産となったためである。しかし、その後、一般米と呼ばれる在来種の増産と、1 人当たり消費量が 1979 年をピークに減少に転じたことから輸入はゼロになっている。

日本は食糧不足期の 51 年から 55 年にかけて 100 万トンを超える輸入を行っていたが、69 年以降は加工原料米輸入が行われているだけである。

アジアの輸入国としては、マレーシア、スリランカ、バングラデシュのほか非農業国（地域）の香港、シンガポールがあるが、いずれも輸入量は多くない。マレーシアではゴムやオイルパーム、スリランカでは茶とゴム等の輸出農作物が農業生産において重要な地位をしめているが、いずれも緑の革命の進展により米の生産が順調に伸び、輸入量は減少傾向にある（85～87 年平均でそれぞれ 27 万トン、18 万トン）。食糧不足国バングラデシュは、外貨不足から輸入は小麦に多くを依存しており（米 34 万トン、小麦は 152 万トン）、安定した輸入を行っているのは香港（37 万トン）、シンガポール（21 万トン）のみである。なお、かつての輸出国ベトナムは 60 年から 74 年にかけて 100 万トンの輸入を行い、87 年にも 45 万トンの輸入を行っていたが、先にふれたように 89 年に入って大量の輸出を行ったといわれる。

最大の輸入地域となったアフリカでは 47 カ国が輸入を行っており、いずれも漸増傾向にある。主な国はコートジボワール（85～87 年平均輸入量 37 万トン）、ナイジェリア（同 36 万トン）、セネガル（同 34 万トン）の西アフリカの 3 国である。ついで同じくマリ、リベリア、シエラレオネと東アフリカのタンザニアとマダガスカルが約 10 万トンの水準にある。なお、アフリカの輸入にはかなり援助が含まれている。

中近東の輸入は各国おしなべて急増した。61～65 年平均と 85～87 年平均を比べると、

イラン 2→61 万トン、イラク 5→53 万トン、サウジアラビア 12→40 万トン、アラブ首長国連邦 0→19 万トン、トルコ 0→11 万トン、シリア 3→10 万トンとなっている。石油収入の増加がそれを可能にしたのであるが、需要増の相当部分はアジア諸国からの大量の収穫労働者の流入によるものとみられる。

中南米でも 33 カ国が輸入を行っているが、85～87 年平均で 10 万トンを超えるのはブラジル、キューバ、ペルーの 3 国である。中南米の輸入量は、ブラジルの作況によって大きく変動する。ブラジルの輸入は、79 年に 71 万トンの大量輸入を行ったのに始まったといっているが、以後 24, 13, 31, 0, 34 万トンと低迷したあと、86 年には 140 万トンの大量輸入を行った（87 年は 10 万トン）。

西欧の米生産国は 5 カ国しかないが、全 19 カ国が輸入を行っている。主要国では、フランス 6→29 万トン、ベルギー・ルクセンブルグ 5→25 万トン、オランダ 6→21 万トンの伸びが顕著であり、イギリス 11→25 万トン、西独 16→29 万トンの伸びは相対的に低い。

なお、西欧の輸入については、加工して再輸出するための輸入が現在もかなり含まれていることに注意する必要がある。たとえば、米の生産を行っていないベルギー・ルクセンブルグは 13 万トン、オランダは 12 万トン、イギリス、西独は 4 万トンの輸出を行っている。

イタリアとスペインは輸出国であるが、85～87 年平均で 67 万トン輸出したイタリアが他方で 23 万トンの輸入を行っており（スペインは 12 万トン輸出、5 万トン輸入）、178 万トンという西欧の輸入の過半は域外からの輸入によるものである。

（４） 1960 年代以降の米貿易市場の変化

（３）——貿易構造——

以上では、米の貿易市場の変化を、輸出面

と輸入面を切り離してみてきた。しかし、輸出、輸入面のこのような変化の中で、輸出地域（国）にとっての輸出相手地域（国）、同様に輸入地域（国）にとっての輸入相手地域（国）も変化したはずである。この変化をみることによって、米の貿易市場の構造はより明確なものになるであろう。

第3表は、輸出入の相手地域（国）別データが得られる国連の貿易統計（Commodity Trade Statistics, Series D）から作成したものである。時期によって掲上されていない国があるため、FAOの数字より小さなものになっており、とくに輸入国が開発途上国である場合には、相手地域（国）別輸入量のデータが存在しないことが多いため、輸出地域（国）サイドからみた数値より著しく小さくなっている。そこで、ここでは、輸出地域からみた相手地域別輸出量を、1965年と1986年について対比させてみることにしよう。不正確さは残るが、大体の傾向はつかめる。

最大の輸出地域であるアジアは、65年には域内輸出が圧倒的比重をしめていたが、86年には半減した。代わってアフリカが最大の輸出相手地域となり、また中近東がアジアに匹敵する地位にまで上昇した。中南米や西欧への輸出も伸びた。

第2の輸出地域である北米も、かつてはアジア向けが主力であったが、今ではほとんどなくなった。代わって、中南米、中近東、アフリカ、西欧の比重が増した（ただし、86年はブラジルの不作の年のために中南米の輸入が多かった年である）。

第3の輸出地域である西欧は、域内輸出が約6割をしめている。これには域内での再輸出が一部含まれている。ほかには中近東とアフリカへの輸出が行われている。

マイナーな輸出地域である中南米の輸出は域内が中心であり、オセアニアは域内のほかアジア、中近東への輸出を伸ばしている。

輸入地域サイドについては、さきに述べた

第3表 輸出地域からみた輸出相手地域別輸出量の推移

(単位：千トン)

		アジア	中近東	西 欧	東 欧	北 米	中南米	アフリカ	オセアニア	計	(参考) FAO数値
ア ジ ア	1965	2,983	143	123	147	—	—	230	8	3,634	5,375
	86	1,398	1,171	395	166	89	516	2,235	23	5,993	8,190
中 近 東	65	96	43	45	124	—	31	3	—	342	386
	86	—	31	1	12	—	—	—	—	44	61
西 欧	65	—	—	—	—	—	1	—	—	—	253
	86	1	231	661	55	1	20	173	—	1,142	2,392
東 欧	65	—	—	1	3	—	—	—	—	4	16
	86	—	1	45	—	—	—	—	—	46	39
北 米	65	799	116	131	3	59	—	231	78	1,417	1,549
	86	77	715	325	6	80	846	450	11	2,510	2,392
中 南 米	65	—	10	58	58	16	91	75	—	308	444
	86	—	2	39	—	—	345	5	—	392	543
ア フ リ カ	65	—	—	9	—	—	1	4	—	14	22
	86	—	—	—	—	—	—	1	—	1	13
オセアニア	66	25	1	7	—	3	—	—	52	88	65
	85	25	21	—	—	—	—	2	69	118	178

資料：UN, Commodity Trade Statistics, Series D.

アジア経済研究所作成の AIDXT システムを利用させていただいた。

ような制約があるので、輸出地域サイドから得られた情報を逆から読むことにする。

輸入地域としてのアジアは、かつて域内のほかアメリカにかなり依存していたが、その比重は下がり、大半を域内に存在するようになった。

最大の輸入地域となったアフリカの主たる依存先は、アジアである。次いで北米が多く、西欧からもかなり輸入している。第2の輸入地域となった中近東は、アジアと北米に依存している。中南米は、北米への依存度が高く、次いでアジアに依存している。

西欧は約4割を域内で調達し、残りを北米とアジアから輸入している。かつては北米の比重がアジアより高かったが、86年には逆転している。

やや古くなるが、アジアについては、より立ち入った説明を可能にする資料がある。アメリカ農務省『アジア諸国における米の貿易と経済』に掲載されている1970年から82年までの統計資料がそれである(第4表)。先にみた輸出相手地域別の動向とほぼ一致しているが、特定の輸出国と特定の輸入地域(国)との結びつきがあることがわかる。ここでは、タイについてだけ少しくわしくみて

おくことにする。

まず、輸出相手国であるが、70～82年の間に1年でも輸出を行ったことのある国は、北米2、中南米8、西欧13、ソ連・東欧5、中近東16、アフリカ37、アジア18、オセアニア5、計103である。中南米がやや少ないが、ほぼ世界の輸入国すべてに1度は輸出していることになる。

次に、362万トンの輸出を行った82年をとりあげて相手地域別輸出量をみると、アフリカ142万トン、アジア132万トン、中近東65万トン、中南米9万トン、西欧8万トン、東欧5万トン、オセアニア0.5万トン、北米0.2万トンとなっている。

主要対象国をあげると、アジアでは、マレーシア39万トン、中国26万トン、インドネシア18万トン、シンガポール17万トン、香港12万トン、ベトナム9万トンであり、アフリカでは、セネガル31万トン、ナイジェリア28万トン、コートジボワール14万トン、カメルーン9万トン、また中近東では、イラン32万トン、イラク13万トン、シリア7万トン、サウジアラビア5万トン、中南米ではキューバ9万トンであった。その他では、イタリア3万トン、ユーゴスラビア3万

第4表 アジア輸出国の輸出相手地域別輸出量の推移

(単位:千トン)

		北 米	中南米	西 欧	ソ連・東欧	中近東	アフリカ	ア ジ ア	オセアニア	計
タ イ	1970	—	—	18	—	145	111	749	1	1,023
	82	15	81	78	50	636	1,433	1,323	5	3,620
ビルマ	70	—	30	56	22	12	59	499	—	677
	82	—	—	41	7	—	268	390	—	701
中 国	70	—	150	22	52	5	19	1,032	—	1,280
	82	—	—	1	40	3	99	249	—	460
パキスタン	70	—	—	8	20	81	6	13	—	130
	82	—	76	2	18	231	322	143	—	794
北朝鮮	70	—	—	—	89	—	—	—	—	89
	82	—	—	—	204	—	—	—	—	204
アジア 計	70	—	181	104	183	274	195	2,945	—	3,882
	82	15	179	122	897	974	2,437	2,388	—	7,012

資料: アメリカ農務省海外農業局『アジア諸国における米の貿易と経済』1984年(全国農業協同組合中央会国際部訳)。

注) 本資料では、北米に中米諸国を含めているので、区分して中南米地域としてまとめた。

トン、ルーマニア2万トン等がある。

日本の生産量の約1.4倍弱の生産量しかないタイ（アメリカは日本の半分以下）が世界への米供給のいわば最終責任を負わされているという現実には、十分留意する必要がある。

4. 世界の米貿易市場の特徴

地域ないし国に着目した世界の米貿易市場の構造がいちおう明らかになったところで、つぎにその特徴について考察してみることにしよう。

世界の米貿易市場の最大の特徴は、それが「薄い」市場であることである。前節でみたように、戦前の世界の米貿易量（輸出量）は965万トンであり、約1億5,200万トン（籾ベース、精米換算9,850万トン）の9.8%をしめていた。この比率は、小麦の貿易量比率にほぼ匹敵するものであった。戦後、米の生産量は着実に増加し、85～87年平均で4億6,700万トン、精米換算で約3億300万トンと約3倍に伸びたが、輸出量は1,200万トンと2割強の増加にとどまり、生産量に対する比率は4%に低下した。小麦の生産量は5億2,000万トン、輸出量は1億400万トン、輸出比率は20%であるから、米の

輸出量は小麦の輸出量の12%、輸出比率では5分の1にすぎない。世界の米の貿易量は、日本の生産量とほぼ同程度にすぎないのである（1,200万トンという貿易量の中には再輸出されるものが含まれている）。

「薄い」市場であり、貿易量も小さいことから、大輸出国も大輸入国もない（第5表）。

1987年についてみると、小麦の場合は、最大の輸出国アメリカが3,260万トン、以下カナダ2,260万トン、フランス1,650万トン、オーストラリア1,490万トンとつづくのに対し、米の最大の輸出国タイは440万トン、以下アメリカ250万トン、パキスタン124万トン、中国120万トンと著しい格差がある。輸入面でも、小麦の場合、上位から順にソ連1,840万トン、中国1,450万トン、エジプト710万トン、日本550万トンであるのに対し、米の場合は、イラン80万トン、ソ連60万トン、中国56万トン、イラク45万トンと著しく少ない。

当然、世界の在庫量も少ない。FAOの推計によれば、87/88年度期末の世界の小麦在庫量1億4,500万トンに対し、米は4,000万トンと3割にみえない。しかも輸出国の在庫量は少ない。同時点でのアメリカの在庫量は100万トンにすぎず、またタイの87年末の在庫量は75万トンであった。在庫量は非

第5表 米と小麦の輸出・輸入の上位10か国（1987年）

（単位：万トン）

輸 出				輸 入			
米		小 麦		米		小 麦	
タイ	444	アメリカ	3,260	イラン	80	ソ連	1,840
アメリカ	247	カナダ	2,262	ソ連	60	中国	1,445
パキスタン	124	フランス	1,648	中国	56	エジプト	708
中国	120	オーストラリア	1,487	イラク	52	日本	548
イタリア	61	アルゼンチン	425	ベトナム	45	イタリア	464
ビルマ	49	イギリス	422	コートジボワール	40	韓国	412
インド	35	西独	274	ナイジェリア	40	イラン	367
北朝鮮	23	ソ連	183	サウジアラビア	38	イラク	311
ウルグアイ	20	イタリア	141	香港	37	アルジェリア	290
オーストラリア	19	ハンガリー	129	セネガル	31	ブラジン	276

資料：FAO "Trade Yearbook".

輸出国、より正確には消費国の人口に比例して大小が決まる。1987年のアジア諸国の在庫量は、中国1,540万トン、インド540万トン、インドネシアと日本が180万トン、フィリピン80万トンといった状況であった⁽¹¹⁾。

しかも、この「薄い」市場は、米の種類、品質等によってさらに細分化されている。商品としての米は、いく通りかに区分される。

第1に、長粒種（インディカ）と中短粒種（ジャポニカ）の区分がある（よりマイナーな区分として、その中間型ジャバニカがある）。すでにみたように世界の大半の地域（国）で生産されるのは長粒種である。

第2に、うるち米、もち米の区分がある。

第3に、やや特異なものとして、赤米や香り米がある。香り米としてはパキスタンのバスマティ米が有名であるが、タイにも独自の香り米があり、高価格で取引される。

第4に、特殊な加工を施した米として、パーボイルド・ライスがある。粳を湯に浸したうへ蒸気を通し、さらに日光で乾燥したうへで、脱穀、精白した米である。また、白米をさらに磨きあげた研磨米やさらに光沢を出すために滑石粉またはグルコースで上塗りし、顔料で着色したヨーロッパやアメリカで高級米として販売される coated rice もある⁽¹²⁾。

品質、等級区分はさらに多様である。日本とは異なり、国際流通は主に精米の形で行われているが、長粒種は精米の過程で碎米が発生するため、その混入率により多くの種類に分けられる。タイ米を例にとると、精米として扱われるものに100%完粒米、碎米混入率5%、10%、15%、その他（25%以上）があり、碎米にはW・R、A-1、C-1、C-3などがある。別に、もち米の完粒米と碎米があり、さらに玄米やパーボイルド・ライスもある。以上は主なものであり、タイの輸出プレミアムは約30の種類別に決められていた⁽¹³⁾。これらは、輸入国の嗜好や経済水準

のいかんによって一般に特定の地域や国に主として輸出される。要するに、米には単一の市場はなく、「極めて多数の小さな市場」⁽¹⁴⁾から成り立っているのである。

以下、現実の貿易の動向に立ち入ってこの点を確認しておこう。

まず、長粒種と中短粒種別については、1987年に開催されたFAO第30回米穀政府間部会の資料がある。これには、1975年以降の3つの時期の輸出状況が掲載されており（第6表）、長粒種の比率は75～77年平均で80%、79～81年平均で76%、83～85年平均では84%となっている。78～81年平均は韓国で大冷害があった80年を含む時期で中短粒種の比率が高くなっているが、83～85年平均では総量1,151万トンのうち中短粒種はわずか180万トンで16%にすぎないのである。

83～85年平均をとりあげて国別内訳をみると、タイ、パキスタン、ビルマのアジア主要国は長粒種を輸出している。アメリカ、中国、オーストラリアは長・中短粒種とも輸出しているが、アメリカは73%、中国は68%が長粒種であり、オーストラリアだけが中短粒種が74%と過半をしめている。しかし、その量は、アメリカ、中国が約50万トン、オーストラリアが27万トンと多くない。日本（14万トン）、EC（5万トン）、スペイン（4万トン）のほかに約30万トンの輸出があるが、内訳は示されていない。

輸入については（第7表）、アフリカ、中近東、アジア、ECについての輸入量しか示されていないが、中短粒種の83～85年平均の輸入量は、アフリカ48万トン、アジア28万トン、中近東とECが7万トンとなっている。それぞれの長粒種輸入量は270万トン、242万トン、227万トン、52万トンであり、いずれも中短粒種の比率はごく低い。アフリカの場合、中短粒種の嗜好を特別に持っている国があるわけではなく、低品質で価格が安か

第6表 長粒種と中短粒種の主要輸出国別輸出力

(単位: 万トン, %)

	輸 出 量			国 別 構 成 比		
	1975~77 平均	79~81 平均	83~85 平均	75~77 平均	79~81 平均	83~85 平均
長 粒 種	694	912	970	80	76	84
イ タ	193	286	409	22	24	35
アメリカ	131	172	140	15	14	12
パキスタン	74	116	111	9	10	10
中国	99	73	98	11	6	8
ビルマ	53	65	68	6	5	6
EC	18	33	33	2	3	3
オーストラリア	7	13	9	1	1	1
その他の	120	155	102	14	13	9
中 短 粒 種	171	280	182	20	24	16
アメリカ	82	96	51	10	8	4
中国 ¹⁾	24	44	47	3	4	4
オーストラリア	15	24	27	2	2	2
日本	1	66	14	—	6	1
EC ²⁾	4	3	5	—	—	—
スペイン	4	6	4	—	—	—
エジプト	17	10	4	2	1	—
その他の	24	32	32	3	3	3
世 界 計	865	1,192	1,152	100	100	100

資料: FAO 第30回米穀政府間部会(1987. 3. 9~3. 13) 資料。

注 1) 台湾を含む。

2) EC 域内貿易は除く。1975~80 年は EC 9 か国, 81 年は EC 10 か国の数値。

第7表 長粒種と中短粒種の主要輸入地域別輸入量

(単位: 万トン, %)

	輸 入 量			各地域の長・中短粒種別比率		
	1975~77 平均	79~81 平均	83~85 平均	75~77 平均	79~81 平均	83~85 平均
ア フ リ カ	116	249	318	100	100	100
長 粒 種	101	224	270	87	90	85
中 短 粒 種	15	24	48	13	10	15
中 近 東	119	177	234	100	100	100
長 粒 種	111	167	227	93	94	97
中 短 粒 種	7	10	7	7	6	3
ア ジ ア	344	393	270	100	100	100
長 粒 種	290	217	242	84	55	90
中 短 粒 種	54	175	28	16	45	10
E C	39	48	59	100	100	100
長 粒 種	31	42	52	79	88	88
中 短 粒 種	8	6	7	21	12	12
世 界 総 輸 入 量	826	1,190	1,134	—	—	—

資料, 注とも前表に同じ。

ったか、または援助によるものではないかと思われる。EC の米生産国であるイタリアとスペインの米は中短粒種に類似しているといわれるが、EC の輸入は長粒種が圧倒的であり、嗜好的にはむしろ長粒種が好まれている

ことがうかがわれる。

いずれにせよ、世界の米貿易市場における中短粒種の比率は低く、中短粒種のみを輸入を行っている国は現在存在しないことに十分留意する必要がある。

次に、品質、等級別の市場についてみよう。世界的な統計が得られないので、最大の輸出国であるタイについて、さきにあげたアメリカ農務省資料によってみることにしよう。

タイは、さきにみたように多くの異なる品質、等級の米の輸出を行っている。82年についてみると（第8表）、最大が100%完粒米の120万トンであるが、砕米 A-1 が86万トン、砕米混入率25%が56万トン、パーボイルド・ライスが51万トンあり、砕米混入率5%、10% やもち米も10万トンを超える。当然のことながら、品質、等級別グループによって、これを輸入する地域（国）も異なっている。輸出品のもっとも多い100%完粒米は、アジアへ69万トン、中近東へ46万トン輸出されたが、アジアの輸入国は所得水準の高いマレーシア31万トン、シンガポール14万トン、インドネシア15万トンとなっている。次に多い砕米（86万トン）は、アフリカへ56万トン、アジアへ28万トンであり、アジアでは中国12万トン、ベトナム9万トンが多い。パーボイルド・ライス51万トンのうち36万トンはアフリカ（うちナイジェリア29万トン）、中近東9万トン、アジア6万トン（大半がバングラデシュ）となっている。

同様の事情は、他の輸出国にも存在する。たとえば、より低質米の産地であるビルマは、71万トンの輸出のうち砕米混入率35%が42

万トン、砕米が10万トン、砕米混入率10%とパーボイルド・ライスが各5万トンといった状況にある。砕米35%の主たる輸出先は、スリランカ、バングラデシュ、コートジボワールである。

このように米の市場が単一でなく、細分化されたものであることは、各地域の仕向け地別の輸出価格をみても分かる（第9表）。

たとえば、1986年にアジアから各地域へ輸出された米の輸出価格をみると、北米向けが308ドル、中近東向け280ドルに対し、アジア域内向けは194ドル、中南米向け172ドル、アフリカ向け140ドルとなっている。

北米からの輸出については、中近東向け290ドル、西欧向け285ドル、アフリカ向け221ドル、アジア向け178ドルといった状況であった。他方、再輸出ものが多いとみられる西欧からの輸出は、北米向け980ドル、西欧域内向け649ドル、アジア向け538ドル、中南米向け476ドル、アフリカ向け323ドルと高かった。

この点は、小麦の場合と大きく異なる。同表でみるように小麦の大輸出地域である北米の域外への輸出価格は、最高が西欧向けの139ドル、最低が中近東、東欧向けの122ドルと17ドルの幅におさまリ、西欧からの輸出は、159ドル（アジア向け）と122ドル（東欧向け）の幅にあり、中南米の輸出は101ドル（中近東向け）と91ドル（アジア向け）

第8表 タイの米の種類別、地域別輸出状況（1982年）

（単位：千トン）

	北 米	中南米	西 欧	ソ連・東欧	中近東	アフリカ	ア ジ ア	オセアニア	計
精 米									
100%完粒米	7	—	23	3	462	22	686	1	1,205
砕米5%混入	—	1	1	27	81	12	1	—	123
砕米10~15%混入	—	21	3	—	3	90	65	2	184
砕 米	1	—	18	—	1	559	282	—	861
玄 米	—	—	27	—	—	—	—	1	28
パーボイルド・ライス	—	—	3	—	88	357	61	—	510
もち米	9	—	2	—	1	—	133	—	145

資料：第4表に同じ。

注）西欧の玄米輸入が相対的に多いのは、玄米と精米に課される輸入課徴金の差がコスト以上に大きいためである。

第9表 米と小麦の主要輸出地域の輸出相手地域別輸出価格（1986年）（単位：ドル/トン）

	アジア	中近東	西欧	東欧	北米	中南米	アフリカ	オセアニア
米								
アジア	194	280	160	110	308	172	140	257
中近東	—	416	306	332	—	—	—	—
西欧	538	274	649	404	980	476	323	954
北米	178	298	285	407	382	190	221	393
中南米	—	292	274	—	—	293	284	—
オセアニア (85)	321	352	260	—	304	—	303	260
小麦								
西欧	152	126	197	122	—	126	149	—
北米	133	122	139	122	110	133	123	—
中南米	91	101	92	92	—	102	95	—
オセアニア	112	118	153	118	—	89	113	127

資料：第3表に同じ。

の幅におさまる。もちろん小麦にも硬質、軟質の差や銘柄差があるから、輸入国によって輸入する小麦に品質等の違いがあるはずだが、米の場合とは事情は決定的に異なっているのである。

米の貿易市場の第2の特徴として、貿易量の年次変動が大きいことがあげられる。

1960年から87年にかけての27年間に、輸出量が前年を下回った年は61、62、66、67、72、74、75、78、82、85、87年とじつに11回あった（なお、小麦も10回あった）。

しかも、この輸出量の減少は、少なくとも80年代にはいるまでは、需要サイドの変動によるよりも、主として供給サイドの変動に起因するものであった。米の生産がアジアのモンスーン地帯に集中していることから、世界の米の生産量が気象事情によって同一方向に変動しやすいことはしばしば指摘されているところである。実際には、最大の生産国である中国と、東南アジアや南アジアの国々の生産の動きはやや異なった動きをするが、中国、インド、ビルマ、タイといった主要生産国のいずれかが不作の年は、アジア地域、ひいては世界の生産量は減少するのが通常である。そして、そのような年には、中国、タイ、ビルマといった輸出国の供給力が減少するた

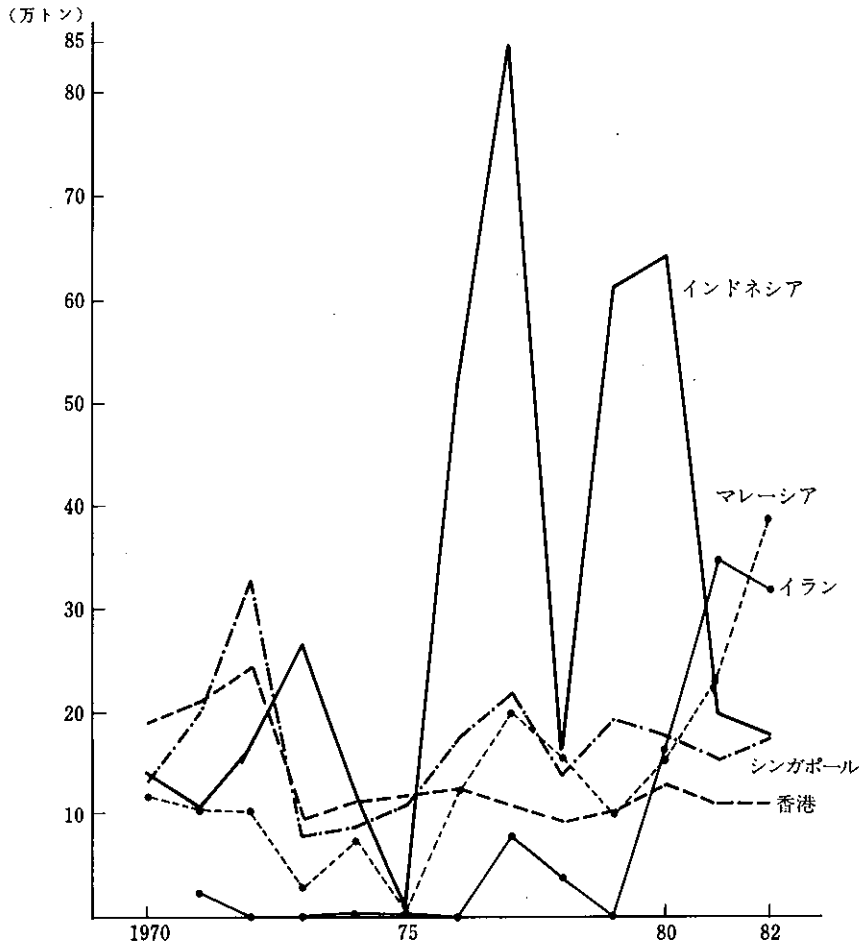
めに、同様に不作であったアジア輸入国の需要の増加にかかわらず貿易量は減少する。

先にあげた輸出量が前年より減少した年についていえば、61、62年は中国が大凶作でその輸出が減少した。65、66年はインドが大凶作で輸入需要は増加したが、66、67年とビルマ、タイが不作で輸出が減少した。72年は食糧危機の年で世界的に生産量が減少した。74年はインド、ビルマ、タイとも不作であった。78年はタイが前年の不作の後遺症で輸出が減少した。

このような世界の輸出量の変動は、個々の輸出国ベースではより大きなものとなり、それはその国に依存する輸入国の輸入量をさらに大きく変動させることになる。第6図はタイをとりあげて相手国別輸出量の変動をみたものである。変動の激しさは一目瞭然であり、とくに国内生産のない香港やシンガポールへの輸出も大きく変動していることが注目されよう。

このように米の輸出量の変動が大きいことは、生産、流通面において米が小麦と異なる特質をもっていることからきている。

第1に、アジアのほとんどの国では自給生産と商品生産が未分化の形で行われており、商品化率が低い。このため、米の商品化が



第6図 タイの主要相手国別輸出量の推移
資料：第4表に同じ。

「余剰量の商品化」の論理に貫かれる傾向が強い。農民は年々変動する生産量の中から自家消費分をまず控除し、残余を市場に供給するから、年々の市場供給量は生産量の変動よりも大幅に変動することになる（他面で「飢餓販売」の側面も現れてくる）。

「余剰量の商品化」の論理は、国際貿易にも妥当する。すなわち、国内消費を優先的に充足した余剰が国際市場に出回る。しかも、生産量に対する貿易量の比率の低い米の場合は、より強く現れることになるのである⁽¹⁵⁾。

第2に、米はもっぱら食用であるのにたい

して小麦は飼料用としても用いられることから、不作時には飼料向けへの削減である程度対応できる。さらに第3には先にふれたように、小麦は、北米、西欧、オーストラリア、カナダと広く生産されるのに対し、米の生産はアジアに集中しており、豊凶変動が同一方向に生じやすいことがあげられよう。

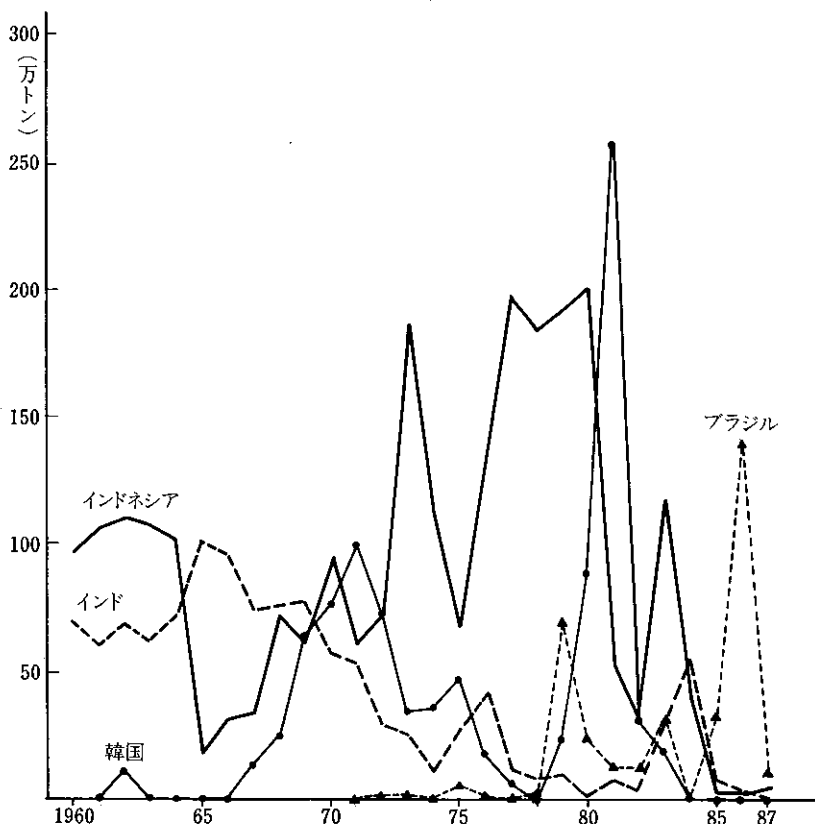
以上みてきたように、貿易量の変動の主たる要因は輸出国サイドにあったが、国別に立ち入ってみると、輸入国サイドの豊凶変動による輸入量の変動も大きい。主要輸入国の輸入量の変動を第7図に掲げたが、これまでの

インド、インドネシア、韓国、ベトナム、ブラジルの輸入量の変動は極めて大きいものであった。これらのうちアジア4カ国ではほぼ自給が達成されたため、輸入国としての変動要因は小さくなった。80年代に入ってから米の主たる輸入地域が米の生産量の少ないアフリカや中近東に移ったことから、輸入需要はある程度安定してきた。しかし、他方でこれまでのアジア輸入国が限界的輸入国兼輸出国になったことによって、今後の貿易量の変動をもたらす要因になっていることは注目しておく必要がある。

このような貿易量の変動から、米の国際価格の変動はこれまで小麦以上に激しいもので

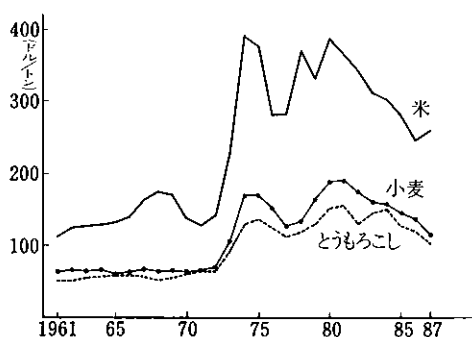
あった（第8図）。先に述べたように米の貿易市場は細分化されているので、米の種類や品質、等級別の騰落率は異なるが、方向としては共通している。たとえば、韓国が中短粒種米の輸入を急増させた80、81年に長粒種の価格が同様に高騰したことは、それを裏書きしている（第9図）。

米の貿易市場の第3の特徴として、政府の関与する程度が他の穀物に比べて強いことがあげられる。政府の関与のもっとも強い形態は、政府または政府機関が独占的に輸出入を担当することであるが、そうでない場合も、民間業者に対して免許制度をとるのが通常である。また、輸出入についてさまざまな規制



第7図 主要輸入国の米輸入量の推移

資料：FAO, Trade Yearbook.



第8図 米、小麦、とうもろこしの輸出価格の推移

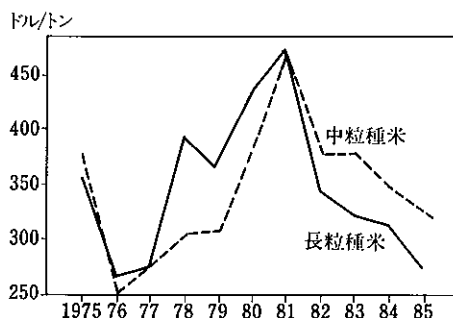
資料：前図に同じ。

や保護を加えたり、または援助の形で国が輸出することが一般的に行われている。

先にあげたアメリカ農務省資料によれば、1984年ころアジアの調査対象19カ国のうち民間貿易を認めていたのは、国内生産のない香港、マカオ、シンガポールのほかはスリランカだけであった。なお、シンガポールとスリランカは、政府が大量の米を輸入していた⁽¹⁶⁾。

アフリカについても、ほとんどの国は、政府ないし政府機関が輸入している。ECにおいても、米は、イタリアやスペインの生産者保護のため共通農業政策の対象とされている。介入価格、目標価格、境界価格が定められ、境界価格以上の輸入に対しては輸入課徴金が課せられ、輸出に当たっては、輸出払戻金が支払われる。ちなみに、85/86年度の境界価格は精米ベースでトン当たり円粒種（中短粒種）749.5ドル、長粒種824.1ドル、輸入課徴金は611ドルであった⁽¹⁷⁾。

アジアの多くの国では、賃金財としての米の重要性から国内価格を守る努力が、輸入国、輸出国を問わず広く行われている⁽¹⁸⁾。さらに根本的には、輸入国の国内価格が国際価格を上回っている国が大半であることが政府の関与（国境措置）を不可避なものにしているのである⁽¹⁹⁾。



第9図 長粒種および中短粒種米の価格の推移

資料：第6表に同じ。

輸出国アメリカについても、たとえば、1987年の輸出量245万トンのうち114万トンが輸出計画による政府保有米の輸出であった（PL 480によるものが43万トン、CCC クレジット64万トン等）⁽²⁰⁾。しかも残りの民間輸出についても、マーケティング・ローン制度が実施され、多額の補助金つき輸出が行われている。タイの場合は、輸出業者の免許制を取り、輸出許可証を発行しているほか、国（商務省対外貿易局）もみずから輸出を行っている。また、国内の生産者と消費者を配慮して、国際価格低下時には輸出税、輸出プレミアムの引下げや最低輸出価格の設定を行い、逆に国際価格上昇に連動して国内価格が高騰したときは輸出規制を行ったり、保有義務を課した在庫の一定量を政府に引渡させる等国际市況に応じて弾力的に対応している⁽²¹⁾。

政府ないし政府機関が輸出入を担当する国が多いことから容易に想像されるように、米の貿易では政府間取引（government-to-government trade）の比率が高い。やや資料は古いが、1979～83年平均の世界貿易量1,170万トンのうち、政府間取引は370万トンで約3分の1をしめていた。内訳は、通常の取引が9割強、残りはバーター取引であった。開発途上国の輸出の50%、輸入の約40%がこれによっていた。政府間取引の80%以上は途上国向けのものである。バーター取

引は長期協定によることが多く、事例として中国とスリランカ（ゴム）、中国とキューバ（砂糖）、インドとソ連（石油）、ウルグアイとイラン（石油）等がある⁽²²⁾。なお、近年現物による貸付も行われている（たとえば86年にインドネシアからフィリピンへ）⁽²³⁾。

このような政府間取引が行われる動機ないしメリットとして、輸出国にとっては政治的に良好な関係を維持するとともに将来の安定した販路を確保すること、輸入国にとっては食糧の安定的確保、多数の民間業者を相手にするよりコストが安いこと、さらに需要に合わせて引渡し延期等を弾力的にしてもらえること等があげられている⁽²⁴⁾。

政府間取引とは別に、この時期に援助としての輸出が約140万トンあったから、米の貿易の半分近くが政府によったものであったことになる⁽²⁵⁾。

米の貿易市場は、決して開かれた自由な貿易市場ではないのである。

5. おわりに

さいごに、米の貿易市場の構造と特徴を要約し、若干の展望を行ったうえで、それが日本にとって持つ意味を考えてみよう。

まず、貿易市場の構造については、戦前は輸出入ともアジア中心であったのに対し、いまはアジアとアメリカが輸出地域（国）となり、アフリカと中近東が主たる輸入地域となった。輸出地域アジアにおいては、おおまかにいってタイが400万トン強、パキスタン120万トン、ビルマ50万トンが主なものである。50年代後半から80年代にかけて100～200万トン、最大時350万トンを超えた中国は、一方で120万トンの輸出を行っている反面50万トンの輸入を行っており、他方、最大の輸入国であったインドとインドネシアでおおむね自給が達成されると同時に、不作年に輸入し、豊作年に輸出する限界的輸入国

兼輸出国に転じた。

アメリカの輸出は戦後着実に増加し、60年代に入って100万トン台、70年代に200万トン台を超え、80、81年には300万トンに達した。以後タイとの競争で減少するが、現在は240～250万トンに回復している。

新たにオーストラリアも輸出国として登場したが、適地の制約があり、また、生産量の変動が激しいという問題がある。

輸入国では、アフリカと中近東がおおむね300万トンに近い水準に達した。他方アジアは激減して、今後輸出国に転じるとみられるベトナム等を加え240万トン程度の水準にある。西欧も200万トン近い輸入量をもつが、半分近くがイタリア、スペインによる域内貿易であり、やや独自の需給圏を形成している。

今後について若干の展望を試みてみよう。タイは、栽培面積の点ではすでに限界に達している。問題は灌漑面積の拡大による単収増がどの程度可能かにかかっているが、生産量は大きくは伸びないとみてよいと思われる。タイは、これまで輸出税、輸出プレミアムを引き下げによってアメリカとの価格競争に勝ってきたが、それもいまやゼロとなった。他方では国内経済の高度成長により都市と農村の所得水準の格差の問題が深刻化しているため、価格は上がることはあってもこれ以上の引き下げは困難になっている。したがって、今後の輸出増は期待しにくいと同時に輸出価格は上昇傾向に転ずるだろう⁽²⁶⁾。パキスタンの供給力の増大も期待しにくく、ビルマは政情不安定や経済の低迷から少なくとも中期的には輸出の増加は期待しにくい。

他方、アメリカはマーケティング・ローンによって辛うじてタイとの競争力を維持している。今後、タイの価格上昇が不可避とみられるので、相対的に有利となるが、米作適地をフルに利用しても最大限400万トン程度の輸出にとどまるであろう。ただし、その大

半は長粒種である⁽²⁷⁾。以上を総合すると米の輸出量の大幅な増大は期待しにくいと思われる。

輸入面では、アフリカと中近東の輸入は今後も増加を続けるであろう。しかし、アフリカには外貨の制約があり、また価格水準が上昇すれば相対的に安い小麦への移行が生じる可能性がある。中近東の増は相当程度産油国の出稼ぎ労働力の需要であるとみられるので、増加のテンポは相対的にゆるやかなものとなるだろう。中南米の輸入は、ブラジルの豊凶によって今後も大きく変動しながらゆるやかに増加することになるだろうが、それほど大きなシェアをしめることはないと思われる。

アジアでは、香港、シンガポール、マレーシアが比較的安定した輸入をつづけるほかは、全体として縮小傾向をつづけることになるだろう。しかし、豊凶による変動はより激しくなる可能性があり、また、中国の輸出入がどう推移するかが注目されよう。

次に、米貿易市場の特徴を小麦のそれと対比する形で整理しておこう。

最大の特徴は、「薄い」市場であることである。生産量に対する貿易量の比率は戦前約10%で小麦と並んでいたが、いまや4%に低下し、小麦の20%の約5分の1に低下した。世界の貿易量は、ほぼ日本の生産量にすぎないのである。

これに関連して3つの点を確認しておこう。

その1は、米の貿易市場は単一の市場ではないことである。まず、長粒種、中短粒種の市場区分がある。83～85年平均で前者は970万トン(84%)、後者は180万トン(16%)であり、中短粒種の貿易量はきわめて少ない。現在の輸出地域としては、アメリカ、オーストラリア、中国があるにすぎないといつてよい。

その2は、米の貿易市場は、種類、等級別に細分されていることである。もち米、パーボイルド米といった種類があるのに加え、う

るち米についても、例えばタイでは100%完粒米のほか、砕米5%、10%、15%、25%混入米、砕米にも、W、R、A-1、C-1、C-3などの区分がある。他の輸入国についても同様である。このような種類や等級に応じて市場が形成されている。その市場は、もちろん価格のいかんによって類似グループと代替関係はあるが、それにしてもたとえば82年のタイの完粒米の輸出は全体の3分の1しかなかったといった事情は注目すべきであろう。

その3は、「薄い」市場がさらに「薄く」なる傾向がみられることである。

61～65年平均と85～87年平均を比べると生産量が94%伸びたのに対し、輸出量は66%の伸びにとどまったため、輸出量の比率は4.4%から4%へ低下した。今後人口増、所得増による需要の拡大に対応して生産は増加をつづけようが、先にみたように輸出量、輸入量の伸びはともにそれほど期待できないので、その比率はさらに低下する可能性がある。

米貿易市場の第2の特徴は、貿易量の変動が激しいことである。これまで変動の激しかったアジア輸入国の自給の達成は一面では変動の緩和要因であるが、限界の輸入国兼輸出国に転換したことによる変動はさげがたいと思われる。

かつては、大生産国である中国が自国の生産量のいかんにかかわらず世界的な不足(高価格)時に輸出して小麦を輸入し、余剰(低価格)年には輸出を抑えるということである程度安全弁の役割を果たしてきたが、近年の状況を見るとこれを期待するのは難しいであろう。

いま1つの変動要因として、米の場合は小麦のように、大量の安定した輸出を行う国がなく、かつ、世界の在庫量が小さいことがあげられる。小麦の場合は、85～87年平均で3,300万トンの輸出量を持つアメリカを筆頭にカナダ2,300万トン、フランス1,600万

トン、オーストラリア 1,500 万トン、という大輸出国があり、アルゼンチンも 400 万トンを超える。これに対し、米の場合、最大のタイで 400 万トン、2 位のアメリカで 250 万トンにすぎない。また、小麦の世界の在庫量は 87/88 年期末で 1 億 4,500 万トンあったが、米の場合は 4,000 万トンにすぎない。これまで価格変動が小麦以上に激しかったのも当然であろう。

第 3 の特徴は、米の貿易市場については、各国政府の関与の程度が強いことである。それは米を主食とする国にとってはそれを確保する必要があること、そしてその自給化政策によって米の貿易市場がますます薄くなるので、輸出国としては生産者保護のため補助金等によって一定の輸出量を確保する必要があることによる。

以上みてきた米貿易市場の構造と特徴が日本にとってもつ意味を考えてみよう。

まず、日本の需要は中短粒種に限られるが、現在その貿易規模はわずか 180 万トンにすぎない。その供給が可能なのは、現状ではアメリカのカリフォルニアとオーストラリアに限られるといってよい。中国は不安定であり、また、スペイン、イタリア、エジプトの輸出量はわずかであり、かつ主に西欧向けである。アメリカの中短粒種の増産はある程度可能だろうが、オーストラリアは限界がある。

他方、中短粒種の輸入市場は狭い。アフリカが最大で 52 万トンあるが、多くは援助米であり、その他はアジア 20 万トン、EC 9 万トン、中近東 6 万トンといったところである。だとすると、もし日本が米の輸入を自由化した場合、中短粒種の輸入市場は日本に限られるといってさしつかえないであろう。極言すれば、日本だけが、アメリカとオーストラリアに依存するという立場に立たされることになる。中短粒種の輸入地域（国）は、いずれも主食が小麦、とうもろこし、雑穀であるか、米である場合も長粒種の国であり、中短粒種

の輸入なしですませる国である。他方、輸出国アメリカとオーストラリアにとって、米は農業生産に占めるシェアが 1% ないしコンマ以下の作物にすぎない。

小麦にも、赤小麦、白小麦、硬質小麦、軟質小麦、デュラム小麦などの種類がある。用途も若干ちがうが、マカロニなどに用いられるデュラム小麦を除けば、代替性は一般に強い。しかも日本は、ソ連、中国、エジプトにつぐ第 4 位の輸入国であって、世界輸入量に占める比率はわずか 5.3% にすぎない。日本が世界の需給から受ける影響は少なくとも他国なみであり、また、日本の輸入が世界の需給に及ぼす影響は小さい。

これに対し、米の場合、日本は、アメリカとオーストラリアという限られた国の豊凶に決定的な影響を受けることになる。

その他の国が中短粒種の生産、とりわけ日本の嗜好に合ったものを作り出すには相当の期間を要しよう。また、アメリカにせよ、その他の国にせよ、中短粒種の増産は長粒種生産からの振り替えによることになる（アメリカの場合、減反の解除である程度は可能だろう）。それは長粒種の需要の逼迫と価格上昇をもたらし、主たる輸入地域であるアフリカと中近東に大きな影響を及ぼすことになる。それらの地域が相対的に価格の安い小麦への輸入に転換すれば、「薄い市場」はますます薄くなるであろう。このような点の配慮なしに、日本の米の輸入自由化問題を議論することは、日本にとっても、また開発途上国の食糧供給安定のうえからも許されないであろう⁽²⁸⁾。

また、第 2 節でみたように、世界の国々は輸出国、輸入国を問わず生産を米の大幅に拡大しており、縮小しているのは日本だけといってよい。しかも、米を主食とせず、穀物生産の中で 1~2% のシェアしかもないアメリカや EC が一方では国内生産者を保護しながら、他方でダンピング輸出をしている現実が

ある。これらの過剰を輸出して米の貿易市場を混乱させている国と、国内需要をまかなう範囲内まで減反している日本とは区別されるべきであろう。

もちろん、以上述べてきたことは、日本がかたくなに世界の米市場から孤立して存在すべきだということを意味するものではない。戦後の食糧不足期の1952年から55年にかけて、日本は100万トンの米の輸入を行っていた。現在も加工原料用米を中心に数万トンの輸入を行っている。また、韓国の80年不作に際しては、79～80年に政府在庫から約100万トンの輸出を貸付けの形でやっている。それがなければ米の国際価格はさらに高騰したに違いない。日本の米に関する政策は、このような米の生産と貿易市場の構造と特徴を十分検討したうえで決定される必要があると考えられるのである。

注1) 辻井 博『世界コメ戦争』(家の光協会、1988年)第4章参照。

(2) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』(岩波書店、1966年)、116ページ。

(3) 同上、138～139ページ。ユベール・デジャン著、木村正明訳『マダガスカル』(白水社、1989年)、34～35、109ページ。

(4) 国際農林業協力協会『ブラジルの農業』(1989年)、22～23ページ。

(5) イランについては岡崎正孝「イランの稲作」(『アジア経済』アジア経済研究所、第32巻第7号)、アフガニスタンについては国際開発センター『未開発地域農林資源開発総合基礎調査報告書』1977年および同補完調査1978年を参照。

(6) 斉藤一夫『米穀経済と経済発展』(大明堂、1974年)、6ページ。

(7) 鈴木宣弘「中国、その他地域の米需給」(大賀圭治編著『米の国際需給と輸入自由化問題』所収)、第2節参照。ただし、その面積は約200万ha程度といわれる(1986年の全作付面積は約3,200万ha)。

(8) 篠浦 光「開発途上国の食糧問題」(今村奈良臣、吉田 忠編『飢餓と飽食の構造』、農山漁村文化協会、1990年、第4部)参照。なお、世界の米の生産の実態については、『世界のコメと稲作』(『農業および園芸』第62巻臨時増刊号、1987年)にくわしく紹介されている。

(9) 以下、本項の叙述は、主として斉藤前掲書20～30ページ、125～132ページによる。

(10) 1990年1月18日の日本経済新聞によれば、1989

年の「米の生産(モミ換算)は前年を8.5%上回る1,802万トン記録した。この結果、88年には年70万トンにおよぶコメの輸入国だったのが、昨年は100万トン以上のコメを輸出する世界第3の輸出国」となった。

(11) アメリカの数字は、USDA “Rice”; Situation and Outlook Report 1988年、アジア諸国の数字は、International Rice Research Institute “World Rice Statistics 1987”による。

(12) 斉藤前掲書、6～7ページ。V.D. ヴィッカイザー、M.K. ベネット著、玉井虎雄、弘田嘉男訳『モンスーン・アジアの米穀経済』(農林水産業生産性向上会議、1958年)、72～79ページ。

(13) The World Bank “THAILAND; Pricing and Marketing Policy for Intensification of Rice Agriculture” 1985, pp 110, 参照。

(14) FAO 第30回米穀政府間部会(1987. 3. 9—13)資料「A: コメの輸出価格」(食糧庁『海外食糧動向 No 45』1989年)、所収、16ページ。

(15) 斉藤前掲書9～11ページ。

(16) 米農務省『アジア諸国における米の貿易と経済』(全国農業協同組合中央会、1985年)、6ページ。なお、同資料は、「米の国際市場は層が薄く分裂しており、また残余的な市場である。その特色は価格変動が激しいことであり、また、この市場で基幹的な担い手となっているのは各国政府である」(1ページ)。「大部分の政府は、米の国際市場を限界的な市場として扱っているため、特定国が輸入する米の数量は大きく異なるかも知れない。さらにまた、貿易パターン(米の原産地)もまた年によって急変することもありうる」(8ページ)と極めて適切に米の貿易市場の特徴をとらえている。

このような認識をもつアメリカ農務省がわが国に対して米の輸入の自由化を一方的に迫るのは、理解しがたいことである。

(17) 前掲 FAO 第30回米穀政府間部会資料「C. EE のコメ政策」。

(18) 前掲 “THAILAND”。

(19) アジアのほとんどの国では政府買入れ価格または最低保証価格を定めて買入れを行っている。価格に拘束で定められるのが通常であるが、これを単純に精米歩留まりで除して試算してみると、1986年に、韓国910ドル、マレーシア642ドル(補助金を含む)、フィリピン343ドル、インドネシア273ドル、インド232ドルとなる、脱穀、調整費用を加えるとさらに高いものとなろう。ちなみに1987年の国際化価格は247ドルであった。

(20) 前掲 USDA “Rice” pp 35。

(21) タイの米政策については、辻井前掲書、前掲 “THAILAND”, “The Rice Policy of Thailand”, in FAO, *Rice: selected aspects of Production, trade and price policies, 1985* 参照。

(22) “Government-to-Government Trade in Rice” (前掲 FAO: Rice 所収)。

(23) 第4回アジア太平洋地域食糧安全保障委員会「特

定アジア諸国間食糧穀物取引」(国際食糧農業協会『世界の農林水産』1989年7月号)。

240 注 22)と同じ。

250 同上。なお、84/85年度は98万トン、85/86年度は110万トンであった(FAO "Food Aid in Figures 1987")。

260 1990年1月14日の日本経済新聞は、1989年の輸出量は590万トンまでいくと思う、というタイ商務省の輸出担当間の談話を乗せている。これが事実とすれば、本文の見方は過小かもしれない。

270 アメリカの米の供給力についてはさまざまな見方がある。辻井博氏は、「アメリカの稲作は、水、土地、労働、資本面でかなりの制約下にある。アメリカの米生産が、近い将来、1981年の史上最大生産量(白米で597万トン)を上回って増加することはほとんどないであろう」(亀谷晃編著『アメリカ米産業の素顔』富民協会、1988年、219ページ)と述べておられる。同年の輸出量はこれまで最高の313万トンであった。他方、これはあくまで試算値であるが、1981年の作付面積154万haに対し、アメリカ農務省は201万haの潜在の作付面積があると推定しており(1975年)、これに1986年の平均単収を仮定すると1986年の輸出量(239万トン)を470万トン上回る輸出が可能ということになる(中川光弘「アメリカの米需給」(前掲大賀編著、所

収)。また、テキサス農工大学のGrant教授は、当研究所での研究会で、今後の増産可能量として、インディカ330万トン、ジャボニカ80万トン(籼ベース)という数字をあげられた。両者の価格は連動しているので、例えばジャボニカだけが大幅に伸びるような事態は考えられないとのことであった。

280 米の自由化が議論される場合、しばしば同じく基礎的物資である石油と対比されるので、この点についてふれておこう。

石油の重要性はいうまでもないが、石油の貿易市場は小麦のそれに類似した性格をもっている。すなわち、供給国としては、サウジアラビア、イラン、イラク、アルジェリア、ナイジェリア、インドネシア、メキシコ、ベネズエラ、イギリス、ソ連等があり、輸入国の中でもアメリカのように相当の自給量を持っている国がある。他方、産油国以外はすべて輸入国であり、原油、精製油を合わせた輸入額では、日本はアメリカに次いで世界第2位の輸入国であるが、全体に占める比率は15%にとどまる(アメリカは19%、3位は西独の9%)。しかも、産油国の大半はもっぱら石油収入で国の経済運営を行っている国であるから、供給を長期間制限することが困難なことは、過去のOPECの歴史を見ても明らかであろう。米とは貿易市場の構造が決定的に異なるのである。